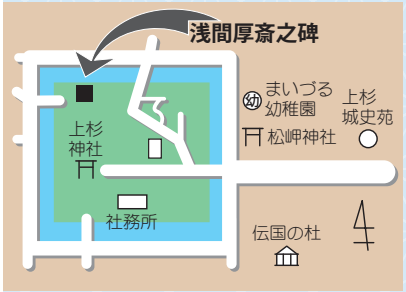
広報よねざわ　2016年4月1日号

城下町ぶらり 続 歴史探訪



▲篆刻は旧藩主の上杉斉憲、碑文は門人の小田切盛徳（長男の万寿之助は上海総領事、横浜正金銀行取締役）の選です。

第16回

浅間厚斎之碑

（丸の内一丁目）

今回は松が岬公園の北西側の土塁に建つ浅間厚斎（厚斎は号・本名は浅間翁助親賢）の顕彰碑を紹介します。厚斎は米沢藩に西洋砲術と大砲を導入した藩士で、門人たちがその遺徳を讃えて建立した石碑です。

江戸で西洋砲術と大砲製造を学ぶ

厚斎は文化2年（1805）に御馬廻組の尻高光隆の次男として生まれ、五十騎組の浅間家の婿養子となりました。天保4年（1833）から藩校興譲館で寄宿生として3年間学び、同10年（1839）に34歳で家督、翌11年から再び興譲館に入り助読（通学生を指導しながら学ぶこと）を3年間勤めました。その後、藩主夫人の目付（側役）を勤める中、西洋砲術の重要性を認識しました。

日本の西洋砲術は長崎の高島秋帆（茂敦）がオランダ人から学んだことに始まり、伊豆の韮山代官・江川太郎左衛門（英龍）に伝授されました。

嘉永3年（1850）、厚斎は江川の門人・井狩作蔵が江戸で砲術を教えていることを知り、自分入料（自己負担）で江戸に登って門人となり、西洋砲術を習得しました。ただし、弾丸・火薬などの経費のため、浅間家では衣服や什器を売り、質素清貧な生活を余儀なくされ、周囲から失笑されたとの苦労話が石碑に刻まれています。

大砲製造し鉄砲総支配に昇進

江戸で学んだ厚斎は、翌4年8月、銅屋町の鋳物師・鈴木善兵衛と共にハンドモチールと称される大砲を鋳造し、発砲演習を行いました。師匠の井狩は高弟の岡健蔵を派遣、発砲は成功し、厚斎は小判10枚、岡は小判3枚の褒賞を受けました。

嘉永6年のペリー艦隊の浦賀来航は日本中を驚かせると共に、西洋砲術の優位性を認識させました。米沢藩でも加速的に火縄銃から西洋砲術への転換が図られます。厚斎は洋式銃隊総裁として西洋砲術を指導し、文久2年（1862）には米沢藩鉄砲隊のトップである鉄砲総支配に任命されました。

また、大砲製造も続け、銅屋町の鈴木清兵衛に12封度加納や6封度ランケホイッスルなどを鋳造させました。

明治17年に門人たちが建立

厚斎は文久3年（1863）に57歳となり隠居しました。その後の戊辰戦争では、厚斎が指導した西洋砲術隊が越後戦線などで活躍しました。明治9年に72歳で死去、墓は西蓮寺にあります。

明治17年、門人たちが厚斎を偲び顕彰碑を建てました。碑文は著名な書家・吉田晩稼の筆で、上山の石工・西川彦七が刻んでいます。吉田は長崎で高島から砲術を習った所縁もあります。

表紙解説

ワクワクの春が来た！～僕たち・私たち、１年生～

卒園式の準備が進む緑ケ丘保育園。この日は4月から小学校に入学する年長さんに、ピカピカのランドセルを背負ってポーズを決めてもらいました。期待に胸を膨らませ、子どもたちは元気いっぱい！小学校でもたくさんのお友達と楽しい思い出を作ってね。（3月15日撮影）

平成28年4月1日発行　No.1493
発行：米沢市　編集：企画調整部秘書広報課
〒992-8501 米沢市金池五丁目2番25号☎0238-22-5111　印刷：㈲青葉堂印刷